

龍雲寺所蔵『東臯心越語録』の紹介

永井 政之

一

平成二七年秋、禅文化歴史博物館は企画展「東臯心越と水戸光圀〜黄門様が招いた異国の禅僧〜」を開催した。筆者はかねて東臯研究に勤しんだこともあり当該企画展図録において「概説 東臯心越伝」を執筆した。

ほぼ同時期、筆者は曹洞宗文化財調査委員会委員の一人として鳥根県浜田市に所在する古刹龍雲寺の文化財調査の報告と解題を執筆していた。その内容は『曹洞宗報』九六四号（平成二八年一月号）において「文化財調査委員会調査目録及び解題」No.三二七として刊行された。龍雲寺の歴史については前掲報告において次のように記した。

鳥根268 龍雲寺 浜田市三隅町芦谷九〇九（平成一九九年九月四日調査）

山号は海蔵山、本尊は釈迦如来。大本山総持寺御直末。もと教院で益田市種にあつたという。永徳二年（一三八二）、三隅信兼が無端祖環（総持寺洞川庵開山）を拝請して禅院として開創する。開山無端ののち、一世瑞巖韶麟、二世玉麟韶天と次第し、三世日照韶光のとき現在の地に移転。戦国時代、三隅氏の滅亡にともない堂宇も罹災した。一〇世用山正受のとき本堂が再建され、また一八世円山周達代にも諸堂整備がなされた。天保八年（一八三七）、浜田藩主松平康爵が竹島事件（密貿易）によって陸奥棚倉（福島県）へ国替えになった際に本堂の寄進がなされた。

この龍雲寺が収蔵する膨大な資料群の一つとしてこの小論で紹介する東臯の語録

がある。その紹介の一文は次のようである。

〔東臯心越語録〕写本一冊、東臯心越撰 卷末に「与達宗和尚 独峰 宝曆四戊（一七五四）七月二十五日」とある。東臯は延宝五年（一六七七）に来朝し、水戸光圀の帰依を受け祇園寺を開いた中国曹洞宗の僧。入院の際の語録は刊行されるが、本資料はそれとは別。備忘録と見るべきか。

〔一〕で括つたのは、原資料が表題を欠いているため、内容から判断して仮題を付したからである。当該資料には、すべてで六〇余点の詩文が収められ、卷末には「日本来由両宗明弁」が書写される。

卷末の一文は、東臯没後五九年の後、「寿昌派」として独立は果たしたものの、衰退の方向にあることは否定できない。「宝曆四年に独峰が達宗に与えた」と読めるが、人名も含めて授与の経緯など詳細はまったく分からない。

いったい東臯関係の資料をまとめたものとしては

浅野斧山『東臯全集』（『全集』と略す）一喝社 一九一一年
高羅佩『明末義僧 東臯禅师集刊』商務印書館 一九四四年
陳智超『旅日高僧東臯心越詩文集』（『詩文集』と略す）中国社会科学出版社 一九九四年

浦江県政協文史資料委員会編『東臯心越全集』浙江人民出版社 二〇〇六年
などのあることが知られ、細部にわたるものもないわけではない（前掲図録参照）。
ところでこれらの先行文献が東臯の言葉のすべてを網羅しているわけではないこと、
今更言うまでもない。このうち『東臯心越全集』にも収録される陳氏による成果

は、浅野氏や高氏の成果を承けつつ、祇園寺等関係各所を博搜し新たな資料の紹介もあつて特筆すべきのだが、本資料と比較検討すると必ずしも十全ではないようにも思われる。

解題において「備忘録」とした由縁はそこにある。では本資料の書写者が備忘のために依拠利用したものがどのようなものであったのかとなると、何らかの編集作業があつたテキストを書写したとはとても思えず、やはりメモ書きの範囲を出ていないように思える。龍雲寺所蔵の経由も当面定かでない。

このようにみると既存の資料では知られることのない東臯の言葉——そこには未知の詩文はもとより、問答、追善などの語がある——を含む本資料の貴重なことが理解できる。紙数などの関係からその全文を翻刻紹介できないので、既存の資料と重複するものについては、その存在を『詩文集』および『全集』における頁数をもって指摘するにとどめ、本資料においてのみ記録されるものについてその全文を掲げる。紹介にあたっては段落順の番号を付した。また多くの詩文には返り点等が付されているが組版の関係から略した。

なおこの小論の執筆は龍雲寺住職野原真承老師と文化財調査委員会の御理解によるものであることを記し、御礼に代えたい。

二

①『詩文集』になし

「心越和尚、因僧問、禪師幾歳学文字。師曰、吾従八歳至十九、見書四千部、書乱人意、故従二十歳、至三十二不見、一習定三十二而豁然大悟。汝但絶学坐看三三三。若不会、截放山僧頭去。僧再拜伏膺」

②「喜月坡禪人來語」『詩文集』一一二頁（『全集』上、一一二九頁）「喜月坡禪師來晤」と同

③表題として「洞山三十四世上塔文和尚印可心越和尚偈云」と記し、以下「無紋印子、云々」の偈があるが『詩文集』にこの体裁のものなし

④『詩文集』二二五頁（『全集』上、三三三頁）に収録されるが、この表題なし

「三種一色頌、次天童覺和尚原韻。正位一色、洞山三十五世心越興儔禪師」

⑤「舟夜上檠山」『詩文集』四二二頁（『全集』上、七三三頁）

⑥「檠山即事」『詩文集』四三三頁（『全集』上、七四四頁）

⑦『詩文集』になし

「舟夜上檠山次示人。同登般若船、共說無生話。會得本來心、休罷休休罷。肯庚申春孟望有十一日、茲上檠山承諸善信置舟相送同話無生、亦是夙薰乘種。今得遇此而希世難遇也。納本愚拙薄德。蒙雅國之深。何以克當耳。舟中是夜、覽山光寂寂、水色蒼蒼、和風扠々、曉露浪々。且道、無生話一句作麼生會。正是渡河須用筏。果然到岸不須舟」

⑧「喜瞻大明國師像偈拈」『詩文集』四六頁（『全集』上、七八頁）

⑨「賦謝光雲英翁禪師兼蒙盛歎慶原韻二章」『詩文集』四七頁（『全集』上、七九頁）

⑩「再示明源信士全提向上不須疑拈此偈以似之」『詩文集』五八頁

⑪「示純知」『詩文集』四二二頁（『全集』上、七三三頁）では「示順知信士」とする

⑫「趙州無」『詩文集』五一頁（『全集』上、八三三頁）では「示道柱信士」とする

⑬「示人」『詩文集』四四頁（『全集』上、七五五頁）では「示説（九首）」の第二首

⑭『詩文集』二二八頁に類似の頌あるも全同ではない

「普門示現、即觀自在、楊枝一滴、弁才三昧、絕無畏心、処処無碍、有感皆通、無求弗建、嘆、度尽閻浮□人、只老婆心恒不退」

⑮「庚申季春十有二日對雨偶興」『詩文集』五〇頁（『全集』上、八二二頁）、「十二日對雨偶興（三首）」の第二句

⑯「舟中見八幡山」『詩文集』四二二頁（『全集』上、七三三頁）

⑰『詩文集』になし

「開光讚。仏如来相莊嚴最勝無與吽得見難得難夙世因難值、今赤旃檀塑、就功少遂一瞻一礼時俱獲菩提智、惟願天人師放光而現瑞、大地諸衆生、普皆蒙饒益」

⑱「庚申季春有九日登諸梵刹復坐南翁軒漫賦一首」『詩文集』五〇頁（『全集』上、

八二頁)では「季春九日登諸刹復南翁軒」

①9 「庚申季春望前一日因坐平左衛門信士軒中偶咏」『詩文集』五一頁〔全集〕上、八三頁)では「十四日過松月軒偶成」

②0 『詩文集』になし

「信士富嶋治兵衛為先慈桂室壽昌優婆夷當二十七週年。桂室香堪隱、返聞自性空、從前皆是妄、今日始知終、心境泯、意地融、祖師闍槓子、触処尺皆通、到頭却是吾家物、任手拈來用不窮」

②1 『詩文集』になし

「信士富嶋治兵衛設薦先嚴禪室道悅居士拈此偈以導之。至道可悅即是無生、見無所見、聞無所聞、須自了不用別尋(以手作一円相云) 咦、以識到家、端的処、何勞特地弁功勳」

②2 『詩文集』になし

「世尊降生頌。皇宮初降時、只為婆心切、好箇雲門且没交涉、尽大地人含冤、未雪惡水、一年一度、澆、知是報恩、知是屈、杲滿菩提円、人天皆喜悅、扶桑今日慈風冽、杜鵑紅子規血処々、兎孫応時擊節」

②3 『詩文集』になし

「庚申四月八日時居月江院恭逢始祖釈迦文仏之辰。拈香展云、昔日降皇宮、九龍咄水、灌沐全身、以至周行七步、目顧四方、於此地、又将第二杪? 惡水潑面淋漓全身、咄露、且道、昔日与今日、是同是別、咦、誰識七步外到処独称尊」

②4 「時歲庚申孟夏九日書此以識所過之勝賞云耳」『詩文集』五六頁〔全集〕上、八九頁)では「贈明源信士」として本資料を序文に扱い、さらに②5に収録される「乾闥婆王献樂時、云々」の偈を収録する。

②5 「指示人」『詩文集』五二頁〔全集〕上、八五頁)では「示道柱信士」とする

②6 『詩文集』になし

「山舟吟。宋人有贈高士山院詩曰、高人居処屋如舟之作。茲過道通信士芳圃登高四望、則林巒遠接、況若出塵偶賦一絶、以識斯時矚目也。時屆清和日正長。黄

花翠麦自生香。至人溝? 灑無余事。怡然独歩歌滄浪」

②7 「贈美參禪師」『詩文集』五四頁〔全集〕上、八七頁)では「似実參禪師(龍海寺)」とする

②8 「示宝山禪俊」『詩文集』五七頁〔全集〕上、九一頁)では「示宝山禪人(名)」とする

②9 『詩文集』になし

「偈薦一翁祐念信士超山妙全信女。一念成真信不違、自来自去即無為、杲能具此超全智、共証菩提只在斯」

③0 『詩文集』になし

「信士津田勝任為薦先室性植妙桂二週之辰拈此□指示耳。二載逍遙返故郷。欣聞妙桂發天香、円明自性真如理、十月何如四月長」

③1 「和來韻」『詩文集』五二頁〔全集〕上、八五頁)では「和痴絶來韻」とする

③2 「庚申初夏日復集南翁軒即事」『詩文集』五四頁〔全集〕上、八七頁)では「初夏日集南翁軒即事」とする

③3 「夜雨懷友和韻」『詩文集』五〇頁〔全集〕上、八二頁)では「和韻(広生)」とする

③4 『詩文集』になし

「海棠吟。一種天生養雪華、春風揺蕩若明霞、留火欲興知多少、幾度相看日已斜」

③5 「素見頌趙州三仏來頌并拈此偈□□之」『詩文集』五八頁〔全集〕上、九二頁)では「素見禪師頌趙州三仏拈此示之」とする

③6 『詩文集』になし

「趙州無。會得本無無、須知無得無、無無無不得、無得不無無」

③7 『詩文集』になし

「趙州無。者箇無無無。非無非不無。但能無無得。無得無非無」

③8 「示醫師」『詩文集』四四頁〔全集〕上、七五頁)では「示説(九首)」のうち第三首

- ③9 『詩文集』になし
「指似人。唯有此智心、遍界也難尋、取撰歸來処、光明亘古今」
- ④0 『詩文集』になし
「指示人。昔人曾覓心、而心不可一性中。一性是法界、念淨了了時、無性亦無界」
- ④1 『詩文集』になし
「未登舟有感。未曾解纜先、肯怕聽潺潺、望洋回首処、情切不堪言」
- ④2 『詩文集』になし
「掃依弟子法名。大興法日、恒朗中天、永徹宏滿、等妙覺円」
- ④3 『詩文集』四四頁(『全集』上、七五頁)では「指示人。人生虚幻、世事浮雲、急究本来、休教錯過、咦、偉哉未了今知了、知了方知知親処」とする
- ④4 「示人」『詩文集』六三頁(『全集』上、九七頁)では「示方法掃一」のうちの第六首。第四句「不須猶予」を「不須疑尽」とする
- ④5 『詩文集』になし
「示人。無位真人、須知來処。將恁麼來、得恁麼去」
- ④6 『詩文集』になし
「仮問心越興儔禪師、龍海美參頓首拜。一、仏有一切経否。一、祖師有一千公案否。一、洞山有五位否。一、和尚示人底有語句否。越曰、一一分明、言言独露。不可作無字看。不可作有字。有之与無、是誰道的、道々看。參曰、説似一物即不中。越曰、連一物也無有是説的是誰。咄。參曰、和尚無味之談、塞断人口、握金剛王宝剑、截断葛藤。到這裡、始知仏法元來不舌頭。此恩越父母。咄。師曰、以如是見方名実見耳。復書一偈云、從前方法不須論、只要無心把性存、撥轉閑頭無一物、有時迥出洞乾坤。「從前方法、云々」以下の偈は『詩文集』五四頁
- ④7 『詩文集』になし
「心越禪師、因僧問、如何是不落偏正底法。師云、当甚破草鞋破木杓。僧云、正恁麼時如何。師云、汝云正恁麼時如何。僧扠袖則出去。」
- ④8 『詩文集』になし
「心越禪師、因卓禪問、如何是觀心第一法。師云、不依有知不依無知。切須修行。禪云、某不会、子細拏看。師云、道非有相非無相。桶底子脱是道。禪礼拜則出去。」
- ④9 『詩文集』になし
「心越禪師、因祖印問、日用如何用心。師云、切須親切。印云、紅塵堆裏如何長養。師云、須問取主人公。印便礼拜去。」
- ⑤0 『詩文集』になし
「心越禪師、因僧問、如何是洞家一大事因縁。師云、饑來吃飯、困來打眠。又問、如何是本来人。師打。□來人是什麼乾屎橛。又問、如何是向上事。師云、待汝一口吸尽西江水來。即向汝道。僧云、作家宗師人天眼目。師云、瞎漢。參堂去。僧礼拜即出去。」
- ⑤1 「示設樂肥前守」『詩文集』五六頁「贈明源信士」の偈の部分に相当する。②4 参照
- ⑤2 『詩文集』になし
「和禪人韻。迷悟兩忘無可念、痴兒原是本来人。茲言至道難思議、放下著時遍界新」
- ⑤3 『詩文集』になし
「和禪人韻。為道如登万仞山、必須努力透重関、且將箇事時々究、莫把工夫片刻間」
- ⑤4 『詩文集』になし
「和禪人韻。超今異古自由人、百尺竿頭好問津、無端煙水茫茫処、誰解曼殊身外身」
- ⑤5 「禪人賀偈」『詩文集』二三頁(『全集』上、五九頁)では「和偈(道樹來韻)」とする
- ⑤6 「五位功勳頌」『詩文集』二〇一頁(『全集』上、三二頁)では「五位功勳」とする
- ⑤7 「梁山觀禪師牧牛頌次韻」『詩文集』一一六頁でも「十牛図」にかかわる「蓮池大師禪宗十牛図次普明禪師韻」を収録するがそれとは別。これからすれば東皐には「十牛図」に関わる二首の頌があったことになる。
「尋牛第一。□步追隨着意尋、拖泥滯水幾多深、者番若見加鞭策、免致蹉跎□夜吟」

「見跡第二。蒼山靄々乱雲多、憶昔經行到也麼、水食安眠常在処、只回如見豈容他」
 「見牛第三。忽見昂頭叫數声、凝眸一望草偏青、東眠西嚙□無定、鼻孔撩天好現成」
 「得牛第四。敢謂猖狂就是渠、從今顛掀要全除、漫將繩子輕々放、指出寰中物外居」
 「牧牛第五。朝遊暮宿不離身、那許縱橫染一塵、劣性日常調伏了、來來往往已隨人」
 「騎牛第六。三間茅屋即吾家、四壁懸蘿散綺霞、今日婦來寂無事、不向人前露爪牙」
 「忘牛存人第七。收放無拘只在山。逍遙落得一身閑、須知格外風光好、別有天地非人間」

「人牛俱忘第八。識得人牛性本空、人牛兩字阿誰通、寄言大地知音者、可透玄關最上宗」

「返本還源第九。造物推遷不論功、悄吹尽角動盲龍、陽春些子真消息、昨日花猶今日紅」

「入鄺垂手第十。等閑脫劫為誰來、撞入街頭笑□腮、會得箇中端的處、休言石上又蓮開」

⑤⑧ 『詩文集』になし

「前接來偈著語云、我二十年、只作境會、倘過着奪境不奪人的、奪却境豈不錯會了也。假如奪人不奪境、人境兩俱奪、又如人境俱不奪、向此□通一語、方許作境會了。若夫身外身、又却有第二文殊那、即如明珠一顆陀陀光灼灼。至於珠不自珠、光不自光。当知光不離珠、珠不離光、光即是珠、珠即是光、珠藏而光隱、光隱而珠藏此、身外身喻可明矣」

「所云、志留？一事乃大法所開、亦人力可奪。倘龍天垂佑、至期果熟。香飄非天地、可能□□前後、二書足見為我用心切矣。如吾宗當盛□子、功若居第一、曷勝言也哉。汝只在相公處用意。豈不知我這裡、別有源頭。但得水到渠成自然池清月現也。」

己未二月二十二日 灯下復書 覆

普禪師 禪座

并附

源流図一 宗派序一 法派偈伍

⑤⑨ 『詩文集』になし

「昨接鴻翰、足見荷法之深矣。茲承雅意、所言箇事、必須時節因緣、偶凌方可行之。且放心寬待數年、未為遲也。如若勉強、不克、猶恐非人之恥、致煩諸佐禪師高誼、遠來但觀面相逢、予亦不過是一箇半箇平常人也。更無一物相將不勝汗顏、此覆

東明山心越 謹覆

諸佐禪師 法座

均此

⑥⑩ 「宗派略序」「詩文集」二八頁「印心記」や「宗譜印」と内容的にはほぼ同じ。

ただし末尾は「皇清庚戌四月八日、実蒙印可、偈云、云々、不贅」とし、次の文がある。

「伝曹洞正宗、位江西、寿昌大和尚諱惠経、号無明。伝曹洞正宗、位福建、東苑大和尚諱元鏡、号湛靈。伝曹洞正宗、住南京天界大和尚、諱道盛、号覺浪。伝曹洞正宗、住杭州臯亭大和尚、諱大文、号澗堂。伝曹洞正宗伝三十一世、惠経禪師、住江西寿昌派曰、

惠元道大興慈濟 悟本伝灯統祖光 性海洞明彰法界 広弘行願証真常

天界老人中興（前次カ）寿新派

惠元道大興 法界一鼎新 通天并徹地 耀古騰今

伝曹洞正宗第三十五世原住杭州永福禪寺 樵雲心越道人 手書

皆歳己未二月二十二日 灯下 序此

⑥⑪ 「日本來由兩宗明弁」「詩文集」八九頁（『全集』上、九頁）とほぼ同文なるも「庚申五月十五日」を欠き、末尾は「東明心越題」とする。

以上、鳥根龍雲寺に所蔵される『東臯心越語録』について既存資料に見ることのできない部分を紹介した。内容の一一については後日を期せざるをえないが、それにして東臯研究に当たっては——それは東臯研究に限らないにしても——活字化された資料だけでは決して十分ではないことを痛感している。

たとえば平成二五年七月、駒澤大学による特別研究助成をえた筆者は、長崎市にのこる東臯関係の史蹟を探るべく医王山延命寺を訪問した。真言宗御室派の同寺は東明山興福寺に隣接しており、渡来直後の東臯がおとずれる機会があったのである。延命寺住職の覚真阿闍梨をはじめとする僧俗は前住尊覚法印の徳を讃仰すべく、石に法華経を書き、それを埋めて塔を建立、依頼を受けた東臯が「医王山延命寺法華三昧塔」の銘文を撰したことが知られる。銘文は浅野『全集』下巻一頁、高羅佩『集刊』八九頁、陳智超『詩文集』三〇頁に所収されるから閲覧に問題はないが、現地で塔を調査してみると、実際に塔に刻まれているのは「銘曰、延命密寺、地萃靈祥。名斯勝概、山号医王、云々」の銘文の部分で、序である「夫塔有如来舍利阿育王所造八万四千塔、云々」の部分はない。また刻まれている文字と、先に挙げた三資料の間には文字の異同がみられる。この間の事情をどう見るか、速断は避けねばならず、当面は指摘に留めておきたい。

そもそも『東臯全集』の編者浅野は「例言」において

此集を宗脈、宗綱、詩偈、題贊、銘跋、雜著、尺牘、琴譜、歌俳等に分ち、詩偈中に示衆、法語、号偈等を混ぜしは、禪師自筆序次の体裁を存せんが為めなり。特に乗炬の偈を取らざりしは、道者の業にあらざれば也。また集中に輯めしは祇園寺所蔵、禪師の原稿の三分の一に過ぎず、徒にその多きを尊ばざればなり、云々。(『全集』上、二頁)

と言い、文字通りの「全集」ではないこと、また葬儀追善に関わる言葉をあえて収録しなかったというのであるから、東臯の禪の全体像をどう捉えるかと言うことからすれば、さらなる資料蒐集も考える必要があるかもしれない。

【追記】

本稿を認めている最中、本禅文化歴史博物館塚田博学芸員より『遊歴雜記』に東臯関係の記事のあることを教示され資料の提供にあずかった。東臯をめぐるエピソードは、現在でも水戸市内岩間薬局において販売される目薬「北斗香」の将来な

どいくつかあるが、荒唐無稽とも言える左の記事も言わば地元の伝承として紹介しておきたい。

いったい『東臯全集』上巻に収録される「東臯心越禪師伝」の末尾で、編者浅野斧山は次のように付記する。

世俗に相い伝うるに、公は師の関羽の裔たるを以て、其の子孫を得んと欲し、侍妾数人するも、師は遂に動ぜず。公、歎服して止む。

文字通り世俗の噂であること言うまでもないが、浅野はこのエピソードをめぐって多記藍溪の記録を引用して、東臯の兄嫁が関帝の末裔ではあっても、東臯が直接関帝の血筋ではないとし、「是に由つて之を觀れば、則ち関羽の裔に非ざること明らかかなり。義公侍妾の妄、亦た知るべきなり」と結ぶ。

浅野の発言に出る「世俗相伝」は、多分、江戸時代、文化年間、十方庵釈敬順の撰述になる『遊歴雜記』初稿の出る次の記述によつたものであるろう。

武州久良岐郡能見堂擲筆山地藏院(曹洞)は、程ヶ谷易の南四里にあり(中略)、寛仁年間御堂関白藤原道長公此処へ光臨したまひ、絶景に愛させたまひ、此地にしばし草庵を結び慰みたまひしとかや。今の本堂僧坊は久世侯の造立にして、擲筆山地藏院と号す。その後延宝の頃かとも、水戸黄門光圀卿は、唐僧東臯心越禪師を具し、此地に来たりたまひ、唐土の西湖と沙汰する瀟湘の八景に表どり、此地にも八景の地名及び四石八木の号と、八景の詩文七言絶句八首を作れり。後又京極兵庫無性居士の和歌八首を作り添てより、武州金沢八景の詩歌とてもはやす事とはなりぬ。詩文八首は心越禪師の作たり。かかれれば万里の海陸を経ず、我産れし国に居て程遠き唐土の風色を眼前に見るの勝地、彼西湖の八景といふも、此土地に似たりとあれば、よろづの事何ぞ余国を慕はんや。されば心越禪師は関羽の曾孫にて頗る博識道德の出家なるに依て、光圀卿は師弟の約をしたまひ、その上御妹君を心越へ嫁せしめたまひ、偕老同穴の絆を以て、永く日本の地に引とどめ置度思召しけるに、年を経るといへども猥敷事曾てなく、却て姫君へ無常苦空の道理をしめし、參禅悟道のをしへ豆やかな

れば、姫君も頓て開悟したまひけり。相州鎌倉の英勝禪寺といへる尼寺の始元是なり。然しより以来能見堂の名高く、四石八木の号及び八景の詩歌を世に伝える事、全く光心両哲の学解によるものなり。

金沢八景や、鎌倉の英勝寺と水戸藩との関係はつとに有名だが、すべて今後の課題として今は渴愛したい。

（未完、細注略）

（ながいまさし 駒澤大学仏教学部教授・禅文化歴史博物館長）